

〈追悼〉

名誉会長 中村元博士のご逝去を悼む

——学会の来し方を顧みて——

峰 島 旭 雄

比較思想学会の創設者で初代会長、のち名誉会長となられた中村元博士（以下、中村先生、先生）は、平成十一年十月十日、西暦二千年、二十一世紀をまえにして逝去された。享年八六歳。ここ一、二年体調をくずされ、大事をとっておられたが、それでも、どうしてもという公の会合、親密なプライベートの会合には、女医であられるご夫人洛子さまの附添いで、出席されてもいたのである。それが平成十一年七月を過ぎるころから次第に臥せられることが多くなり、外出されることはなくなり、今にして思えば最後の機会となった、八月十九日の東方研究会（東方学院）主催の第九回「宗教講座」（鎌倉 鶴岡八幡宮）にもプログラムに「中村元先生ご挨拶」と記されていたが、ついにお見えになることはなかった。

戦後の混乱——わが国、私どもがいまだかつて経験したことが

なかった「敗戦」という出来事——の中で物的にも精神的にもバニック状態に陥っていたころ、すでに心ある人々の活動が始まっていた。戦後は物的な窮乏はいくまでもなくいちじるしかかったが、これに対処する手だては徐々にではあるが整えられていったと思う。心ある人々が憂えたのはむしろ精神的な混乱であった。日本の再建には物的なものの安定が必要であることはいくまでもなかったが、精神的な虚脱状態、飢餓状態こそもっとも憂うべきことであると、これらの心ある人々は考えたのである。たとえば、早稲田大学の哲学教授、とりわけアリストテレス『形而上学』の本邦初訳で知られた岩崎勉教授は、いわゆる象牙の塔にもつたままであったが、戦後直後に、かかる精神的状態への憂慮から、これをいかにすべきかの一文をノートに書きつけておられる。

中村先生もその例外ではなかった。そのことを述べるためには

松尾宝作博士に触れなければならない。松尾博士は金沢の篤志家で、医院を経営するかたわら、特に戦後の精神的荒廃に面して、戦後直後に金沢の地で文化講演会を催し、遠く東京からも川田熊太郎博士やほかならぬ中村元先生をお招きしたのである。松尾博士は日本の精神的混沌に対処するには教育の問題が大事であるとの考えから、金沢大学に教育社会センター（大学開放講座）を寄付し、清沢満之の一番弟子である暁烏敏の「暁烏文庫」にも関与して、仏教研究・仏教文化を北陸の地に興すことに努められた。中村先生は「わたくしはそのところから博士と心をゆるす間柄となった」と述べておられる。（『比較思想の軌跡』東京書籍、五〇八頁）ちなみに、本学会の設立当初、このセンターで学んだ方々が多く会員になったのである。

松尾氏はまた、同学の士と語らい、日本印度学仏教学会（あるいは日本宗教学会？）に比較思想的な研究発表部会を設置するように要請したかと思う。多くの部会に分かれる同学会の大会にたしか、要請のような比較思想的な部会が加えられたように記憶する。しかし長続きはしなかったようである。「それで、どうしたものかというので、……『松尾博士は』守屋茂先生とか吉原肇先生という長老の方々と相談されて、ではひとつ自分たちだけで動きを始めようというて、ごく少数の方々が集まられた。わたくしは、あまりこういうことには関与しなかったのだが、たまたま東京にいたので、少しお世話した。そうしたら急に学会をつくら

うということになって、それがグーッと大きくなって、アツという間に（『比較思想学会が』できてしまったわけである。」（同四六二―四六三頁）先生は謙遜されて、あまり関与しなかったように書かれているが、先生のリード、サポートなしには本学会が生まれなかったことは、いうまでもない。なおこの創設には末木剛博教授（東大名誉教授）がかかわっていたことを逸すことができない。（詳しくは学会誌『比較思想研究』第25号、拙稿「創立二十五周年に寄せて」参照。）

比較思想学会はある意味では、はなばなしくスタートしたといってもよい。しかし、その実状は、既存の学問体系、既存の学会組織の中で、困難を伴ったことは否めない。この情況の突破を先生は「一本槍」「一番槍」の例えで語っている。（拙稿「中村元先生のことども」『現代思想』一九九・十二、参照）学会が創設されてしばらく時が経ったとき、松尾博士はあらたな提言をなさった。それは、学会での発表を聴いていると、方法がさまざまである、学会として比較の方法を統一すべきである、というものであった。これに対してはただちに反対の意見も寄せられたが、先生は松尾博士のこの提案に対してこれを無下にしりぞけることはなく、「検討すべし」というお気持ちであったと思う。結局、学会としてではなく、学会の事務局が置かれている大正大学の西洋哲学研究室で、比較方法論の検討を引き受けることとなった。大正大学で私の同期同学、当時の西洋哲学主任教授であった故臼木淑夫氏

に話を持っていき成立したのである。

そもそも大正大学の西洋哲学研究室は異色あるところである。

大正年間、仏教総合大学を企画し、天台・真言（二派）・浄土三宗が、大正大学設立に向かったが、大正から昭和への転換となつて、実際成立したのは昭和二年であつた。そのときから、いわゆる哲史文の中に（西洋）哲学がその第一に設けられている。（戦後までいくたの変遷があるが）仏教系大学の中の西洋哲学といえは、そこに比較哲学的な雰囲気が生ずることは、過言を要しない。じつ、初期の主任教授は椎尾升匡、矢吹慶輝の仏教（哲）学者であつた。その後、東大の伊藤吉之助教授が長く戦後まで主任を兼任された。その後の主任教授をたどつてみても、佐藤賢順（比較宗教哲学）・坂戸智海（天台思想・スピノザ）・岩崎務（兼任、比較徳論）・梶方光運（般若思想、M・ウェーバー）・白木淑夫（カント、一遍）各教授など、もっぱら、あるいはなんらかの仕方、比較哲学の展開に裨（たす）して、川田熊太郎博士も講師として比較哲学を講じておられる。このような伝統を背負つて、松尾博士の示唆による比較哲学方法論のグループ研究が始まつたのである。（このようなわけで、一九九九年六月より学会会長に就かれた吉田宏哲氏が、大正大学出身で、東大で玉城康四郎博士に学び、大正大学へもどつて大学院研究科長として、比較哲学をベースとして学会の進展をはかつているのも、また創設以来学会事務局が大正大学に置かれているのも、故なしとしないのである。）

右のグループ研究は二、三年にわたつて、大正大学西洋哲学研究室とその周辺でおこなわれ、何回かの合宿、発表、討議を経て、『比較哲学方法論の研究（心源の研究）』（白木淑夫・峰島旭雄編、東京書籍）として公にされた。第七回大会（一九八〇年、甲南女子大学）の後、松尾博士のおひざもと、金沢で、中村会長ほか関係の人々が集まつて、刊行祝賀会も催された。この書の内容は、しかし、方法を一つに統一するのではなく、さまざまな角度から方法論を検討し、その時点での、ある意味では学会レベルの成果を提示したものである。それとは別に、中村先生は松尾博士の長年の考え、主張をとりまとめた『一の論理』出版を助けられ（北樹出版、さらにこれをアメリカの Kenneth K. Inada 教授「大乘起信論」の英訳等がある）に依頼して、これを Hawaii U. P. から刊行する運びとなつた。『The Logic of Unity』がそれである。

中村先生の思い出、ないしは学会の中村先生にかかわることを書くべきところ、松尾博士のお名のほうがたびたび出て申し訳ないことであるが、そのことを通じて、中村先生の、学問・学会に対する態度、既存の学問体系・学会組織の中で新機軸を慎重（かつ大胆）に打ち出す仕方、ご自身の考えに必ずしもそわない思想や方法でもこれを無下にしりぞけず、むしろ包摂し、そこから新しいあり方が生み出されるように導くなどの、一連の仕方が、この事例によく示されていると思うのである。

宗教学の大家、増谷文雄博士は、仏教のむずかしい教を「増

谷節」と称された流暢な文章で説きあかされたのであるが、一生の間に等身大の著書を公にすることを念願としたと伝えられる。

中村先生の場合はご自身の背丈の三倍以上にはなるとのことである。(前田専学氏「中村元先生の輝かしい業績」『大法論』第67巻(平成十二年 第1号) 先生は一生の間に何万枚、何十万枚の原稿を書かれたことであろうか。私どもは先生から原稿を頂くと、それが二百字詰(先生はふつう二百字詰を用いられた)原稿用紙で何枚になるか、数えるのに骨折った。というのは、折目一つに一字入っていない場合もあるけれども、書き下ろしてある中で、ある部分で、他のどこかにすでに載せられたもののコピーが貼りつけられてあるのである。これをいちいち厳密に数えるのも面倒で、概数で枚数を割り出す。するとたいがい予定したページ数より多くなる。このような経験をしたことがしばしばあった。この種の原稿は、先生なきあと、書斎に残されているのであろうか。

私どもはかつて、先生にわざわざ静岡県島田市郊外の鈴木貴統氏別邸に来ていただいて、対談をさせていただいたことがある。

この対談は江戸期の建築手法による約百年まえの木造日本家屋「釣耕苑」で行われた。先生がおなくなりになった直後、この対談を主催した邑心文庫社長の岩崎利一氏や編集長の清水正行氏、そしていつも対談に同席するコーディネーター役の帝京平成大学の清水良衛教授から、中村先生の追悼の対談をしたいという申し出があった。この対談の趣旨に賛同してくださり、中村先生のご

長女、三木純子様が来てくださることになった。かつて先生を囲んで対談したとき参加・聴講した島田周辺の方々(教員委員あり会社経営者あり専業主婦あり)も、また集まっていただけだ。

この追悼対談はすでに邑心文庫季刊『ころ』誌(第53号、平成十二年一月)に載ったのであるが、学会の会員諸氏は本誌にあまり接していないとおもわれるので、その中から、許しを得て、二つのエピソードを引用したい。一つは、先生が一九九九年七月ころからかなり体調をくずされ、八月十九日の東方研究会(東方学院 主催の鎌倉鶴岡八幡宮での「宗教講座」)にもお出ましになれなかったことはすでに記したところであるが、闘病の九月を経て、十月十日におなくなりになった。純子様のお話では、なくなる直前まで、臥しておられながら、なにか原稿を書く手振りをなさったという。先生のモットーは「生涯現役」であった。先生は、夢みつつ、最後の最後まで、何万枚、何十万枚の原稿を書きつけられたのである。

もう一つは、さらに驚くべきことなのである。おなくなりになる一週間ほどまえだという。先生ご一家も長い間のご看病であったので、夜は看護婦さんに代わってもらっておられた。看護婦さんによると、午後十一時すぎころ、先生は、横になったまま、「ただいまから講義をいたします。具合がわるいので横になったまままで失礼します。」とおっしゃって、かっつきり四十五分間、明確な口調で講義をされ(残念ながらその内容は難解で、看護婦さんに

は分らなかったとのこと、「講義を終わります。横になったまま
で失礼しました。ご質問がありますか」とはっきり言われたとい
うのである。長年の教壇での蘊蓄をかたむけた講義が、潜在意識
から顕在化されたといってしまうえばそれだけのことであるが、
「人の死なんとするや、その声やよし」の感に堪えない。そのあ
と、ご家族はもしかするとまたそのようなことがあるかもしれな
いと思われて、録音テープを用意されたが、ついに二度とそのこ
とは起こらなかった。

「巨星落つ」という感慨は私一人であろうか。つい本誌の前号、
第二十五号に「中村元名誉会長の現況」という表題で、先生のご
健在のことを書いたばかりである。つづく第二十六号の本誌に、
先生の追悼の一文を、現会長に代わって書くことになろうとは、
夢にも思っていなかったことである。

自誓院向学創元居士。ご冥福を心からご祈念申し上げます。

*記憶をたどって書いたので、日付その他不正確なこともあろうかと思
われる。ご寛恕をお願いしたい。

(みねしま・ひでお、前比較思想学会会長)